

高島 英幸 (東京外国語大学教授)

西は海に、東は山に抱かれた美味しい水の豊富な福井で生まれました。今日ある私を育ててくださった学校(園)は、栄冠幼稚園、順化小学校、明道中学校、藤島高等学校、そして、大学(学部)は福井大学です。当時は、「聞くこと・話すことの音声による英語教育は福井が日本一」というくらいオーラル・コミュニケーションの指導が徹底されていて、最先端の英語教育の恩恵を受けた生徒のひとりでした。



## 私の英語教育学の基盤

— 福井の英語教育 —

高島 英幸 (東京外国語大学教授)

まず、50年を迎えられた「福井県英語研究会」にお祝いを申し上げます。福井県の伝統ある英語教育の歴史の中で、様々な実践・実績を積み上げてきてくださった諸先輩、先生方、事務局や関係者の方々のご苦勞・ご努力に心より感謝申し上げます。また、私をご指名くださり、記念誌に寄稿させていただく機会を与えてくださったことに厚くお礼申し上げます。

幸運にも福井の地に生を受けましたお陰で、50年という長い歴史を持つ「福井県英語研究会」の歩みの中で、私は中学・高等学校の6年間にわたり、「福井の英語教育」という、いわば、イマージョンプログラム (immersion program) にどっぷりと浸ることができました。中学校入学時より、音声中心で、コミュニケーションの手段として英語が使えるようになる指導を受けてきました。私の音声による英語力が着実に伸びたことを実感したのは、後でも再度ご登場いただく、堀口久生先生がご自身のお声で録音された「英語放送テスト」と辻本文彦先生がご担当くださった中・高校英語セミナーでした。前者では、英語の音声に慣れ親しむことの重要性を常に意識させられ、後者では、英語をコミュニケーションの手段として使うためには、音に出してみる事が大切であることと、その難しさを経験することができました。「文法訳読式」の授業が隆盛だった時代に、画期的でユニークなご指導をされる先生方に巡り合えたことが、その後、私が英語教育人生を歩むことを決定づけることとなりました。外国語である英語も、母語である日本語と同じ「心を伝えることば」であり、コミュニケーションのための一手段であることを、12歳から6年の間、「福井県英語研究会」から実に多くのことを学びました。この会で先生方が常に研究されてきたことが実際の授業に生かされ、中・高校生のコミュニケーションに対する意欲を高め、英語力をつけていただいたと実感しております。

記憶をさらに辿りますと、母校、明道中学校入学説明会の席上で、母親が、「毎朝、20分間の「NHKラジオ基礎英語」をお子さんに聞かせるように」と聞いたことが、その後3年間、母親と私との起床を巡っての喧嘩の種となりました。説明会でのことばは、新しい教科であり、また、外国語である英語に関する学校からの至上命令として母親には認識され、私に伝達されました。以後、私にとっては、睡魔との格闘の日々が3年間続きました。気がつくと、よく次の「ロシア語講座」のテーマ・ミュージックで目が覚めたり、放送中に、寝ている私にそおっと近寄った母親の「また、寝てる！」との叱咤に対し、「起きてる！」と言り返す、そんな日々の連続でした。しかし、この睡眠学習(?)の成果か、中学校の授業で「基礎英語」が復習教材として使用された時には、すでに耳に馴染んでおり、実に聞きやすく覚えやすく「英語で楽をした」記憶があります。まさに、現行の『中学校学習指導要領外国

語科』の目標である「実践的なコミュニケーション能力」の確固とした基礎・基盤を教室内外で身につけることができたと思います。このことが出発点となり、現在、日本の小学校から大学までの英語教育の方向性を、実践と理論の両面から常に軌道修正を求めながら見極めていこうと、微力ながら日々努力する機会をいただいております。

さらに、少し具体的なお名前を挙げて中・高等学校時代に受けた英語教育を思い返しますと、「パーマー賞」に輝いた明道中学校では、田上定雄先生の口角泡を飛ばすような発音・口調と厳しさの中の優しさを、辻本文彦先生には、英検と数多くのスピーチコンテストでの表現方法を、中島孝先生と塚谷才治先生には、高校入試対策を超えた英語の醍醐味を教えていただきました。田上先生の顔を右斜め45度に曲げ、ポケットに手を入れながら、日本語の「ペン」と英語の pen の違いや、「テーブル」と table の違いなど、顔を真っ赤にして紙に唾が飛び散る勢いで発音され、英語の発音がいかにも日本語と違って強く発声されるのかをデモンストレーションしてくださったご指導は忘れることができません。今、私自身が研修会で講師を務めるときに、この例を使わせていただいています。その時の私の表情が面白いためか、実に聴衆に受けます！

また、藤島高校では、堀口久生先生には美しい発音と声の重要性、ニヒルな笑顔が印象的な森茂先生には、英文和訳が醸し出す美しさ(たとえば, be scattered with jewelry を「宝石がちりばめられた」)や母語である日本語を大切にしながら英語のセンスを磨くことを体得させていただきました。森先生には、単語の覚え方、たとえば、「記念日」は「兄がばっさり (anniversary) やられた記念日」などを教えていただいたことを、今も先生の日焼けしたお顔や表情とともによく覚えております。他にも、授業中間違ったことを発言しても決して責めることなく、よく考えたと勇気づけてくださり、褒めることの大切さを教えてくださった増永幹敏先生、さらに、英語の軽快さと読みの際のスキミングの大切さは上田歳男先生から、基本的な150の構文を覚えれば英語の構文は完璧であると暗記の重要性に気づかせてくださった後藤伸也先生など、英語の学習の核となることを実に多くの先生方から教えていただきました。

特に、今、私が、人前で話ができるようになったのは、中学校3年生の時、前述の辻本文彦先生の手厚いご指導の元、多くのスピーチコンテストに参加したお陰だと思っております。テープによるスピーチコンテストでは全国3位という成績を収めることができました。それは“Bicycle Highways”というタイトルで、当時、許されていなかった自転車通学についてと、まだ日本には存在していなかった「自転車専用道路」が欲しいという内容でした。毎日の特訓と、「自転車専用道路」という当時としてはユニークな内容であったために、今でも冒頭の部分をはっきりと記憶しております。

Hello, ladies and gentlemen. I am Hideyuki Takashima from Meido Junior High School in Fukui. The title of my speech is “Bicycle Highways”. I want a long highway for bicycles, because our school does not allow us to go to school by bicycle. In Wisconsin in America, my English teacher told me that they have bicycle highways for people to enjoy riding. So students there can go to school by bicycle. I am very envious of them, because ….

14歳のときには、allow の発音が、「アロウ」ではなく「アラウ」であることを叩き込まれ、英語の文は、カンマやピリオドのところまで流れるように一気に音を繋げて読むものであることを体得しました。

英語の授業での思い出は、勉強ばかりではありません。冗談好きな私の洒落を、叱るのではなく笑

顔で受け流していただいたことで、ユーモアのセンスも磨かれたのではないかと思います。先の堀口久生先生の授業では、予習をしておらず、訳の載っている、当時、『教科書ガイド』と言われていたものを見ながら答えた私に、「高島くん、それ、三文か？」と問われたことに対して、「たいしたもんでありません！」と答えたことがありました。叱られると思いましたが、笑顔で「たいしたもんでないか」と感心したように言われ、授業が進んでいきました。このように、寛大で言葉遊び（ジョーク）を理解してくださるのは英語の先生ならではのと思いました。気持ちに余裕のある先生の対応は、何年もの年月を経ても、楽しい思い出として蘇ってきます。

これまでお名前を挙げさせていただいた先生方に加えて、思い出深い恩師として、福井大学教育学部で英語科教育法の原点を講義くださった茨山良夫先生、福井大学附属中学校の教育実習で「生徒のための授業をすること」をご教示くださった稲光彦先生がおられます。今ではお二人からの直接のお教養を請うことはできなくなってしまいましたが、実践と理論の結びつきを大切にしながら日本の英語教育学の方向性を示してくださったのは茨山先生、英語の授業に対するセンスを研ぎ澄ますことの大切さを教えてくださったのは、稲先生でした。このお二人が私に授けてくださったものを大切に、小学校における外国語活動を含めて、日本の英語教育の方向性を私なりに提案して参ります。

福井県との英語を通しての繋がりとしては、平成18年度から小学校にも継続的にお邪魔させていただいております。啓蒙小学校の渋川久美子先生を始め、諸先生方と外国語（英語）活動の在り方を児童達のために考えております。渋川先生は、発達段階に合った、体験を重視する小学校教育課程として最も適切な「プロジェクト型外国語（英語）活動」を、飯田暁美先生と共に学校をあげて実践しておられます。

ここまで多くの先生方のお名前をご許可なく使わせていただきました。他にも、短期間であったり、記憶が薄れたためにお名前が出ない非常勤の先生方がおられます。この場をお借りしてお礼申し上げます。拙文をお読みくださっている方で、誰一人として、ここにお名前を挙げた方々を知らない方はおられないと思います。私を育てていただいた福井の先生方に何かご恩返しができればと、いつも思っております。福井の英語教育にお役に立つのであればいつでも飛んで戻って参りますので、お声をかけてください（hideatgaigo@tufs.ac.jp）。皆様にお会いできますことを楽しみにしておりますと共に、必ずお役に立ちたいといつも考えております。

「福井県英語研究会」のますますのご発展と、「研究会」に関わっておられる諸先生方や事務局の方々のご多幸を、心よりお祈りいたしております。